

地域研究の構図

——名称にこだわって

立本成文*

キーワード 地域性、総合性、現代性、超領域、多元主義

- | | |
|----------------|----------------|
| I. いろいろな地域研究 | 2. 総合性 (研究の方法) |
| II. 対象・方法・目的 | 3. 現代性 (研究の目的) |
| 1. 地域性 (研究の対象) | III. 何を生むか |
| a 地域設定 | 1. 作品 |
| b 地域の意味 | 2. 教育 |
| c 研究の内容 | IV. 地域研究の将来 |

I. いろいろな地域研究

地域研究はいったいどうあるべきか、という問いに悩まされない〈地域研究〉者はいないであろう。そしてその答えは作品でしか示し得ないということも確かである。それにもかかわらず本論で行おうとしているのは、空虚な地域研究論である。*1 それを行う理由は、今地域研究は十分に熟さないままに荒波の中を船出しているという認識がある。そのまま放っておけば地域研究という船は波間に消えていってしまう恐れさえあるからである。地域研究者という看板をかけるかぎり、船を沈めないばかりでなく、その進路を見極め、針路を正しく取らねばならないという使命感がある。同じ道を行く同志を一人でも多くしようという願いから本論は書かれている。

話をできるだけ鮮明にするために、いわゆる地域研究者と称している人々のディスコースを取り上げ、研究の対象、方法、目的から右派と左派グループに分けて議論する。地域研究をす

* 京都大学東南アジア研究センター教授

*1 京都大学東南アジア研究センターと地域研究企画交流センターとの間の連携研究の一環としてまとめた「地域概念と地域研究」共同研究（主査：松原正毅・古川久雄）のセミナー（1996年4月27日）で「地域研究者のディスコース」として発表したのをまとめたものである。なお、教育に関してはその前に東南アジア研究センターの所員討論会で話したこ

とに基づいている。松原正毅、吉田集而、白杵陽、阿部健一、古川久雄、高谷好一諸氏などセミナー・討論会参加者のコメントに感謝する次第である。また、原稿になってから、東南アジア研究センターの同僚に読んでもらい加藤剛、水野広祐両氏などからコメントをいただいた。とくに白石隆、海田能宏、西淵光昭諸氏のコメントは書き直す際に大変参考になった。記して謝す次第である。

るにあたって、右派は既存のディシプリンに対して古典的な伝統主義者であり、左派は浪漫的な脱構築主義者であることが、その違いのひとつである。^{*2} したがって右派はディシプリンに加えて地域研究をし、左派はディシプリンを越えて地域研究に特化する。ディシプリンと地域研究を二元的に考えているのではない。地域研究の性格をあいまいにしたまま、単にディシプリンを否定するような言説をもって安易に地域研究とすることには、もちろん賛成できない。

右と左とに対比させて論を進めるが、かといって右か左かという二元論では決してない。スペクトラムとして連続している言説を無理に右派と左派に分けているのである。しかもかなり折衷的のいろいろな言説を集めてきて、それを恣意的に右派と左派とに構成したものである。したがって、それぞれのグループの対象、方法、目的が論理的に一貫しているというのではない。せいぜい言説としては相互に関連しているとしかいえない。その意図は単純化することによって、問題を浮き彫りにしたかったからである。一種の理念型としてまとめられている。

しかしながら、右派でも左派でも良いというのではない。右派の言説に近づけば近づくほど地域研究という船を破滅に向かわせる獅子身中の虫であるというのが、本論の主旨である。身中といったのは右派の言説が地域研究という名称を使い、彼らの研究が正しい地域研究であると主張するからである。その名称を使わないのならそれはそれでひとつの立派な選択であり左派的な地域研究と十分協同していけるのである。その最も良い例が、研究部門を地域別に行っているが、人類学・民族学のディシプリンに忠実であるとする国立民族学博物館である。^{*3} もう少し穏やかにいえば、右派の人は遅かれ早かれ、地域研究から離れていくであろうし、右派的な地域研究は、地域に関する一定の情報が蓄積されれば、お役御免となって存在根拠を失ってしまうだろうということである。だからといって左派が簡単に生きのびることができるとは考えていない。むしろ右派より早く消滅してしまうかもしれない危険もある。

私自身は右派か左派かと問われれば、作品はともかく言説においては左派と答えざるを得ないが、むしろ修正左派、時には中道派の地域研究者でありたいと思っている。そのような立場があるということは右と左とが交わることがないという二元論は誤りであり、そもそも右派・左派問題などは存在していないという論拠にもなる。自分の作った案山子に向かって剣を振り上げているようなものかもしれない。もっとも問題は、旗幟を鮮明にするのが大切なのではない。それに基づいた作品を作りあげることであることを再度確認しておきたい。現在は多くの地域について絶対的にその作品の量、地域の正しい情報量が不足しているということは

*2 古典的と浪漫的に関しては大西 [1960: 89] を参照されたい。地域研究者の立場ということ、 α 、 β 、 ω というふうにまとめたことがある [立本 1996b (論文の初出は1994年である)]。右派の言説はほぼ α 、 β にあたるが、 $\alpha\beta$ 、 χ もその中に入るかもしれない。左派の言説は ω にあたると考えてもよからう。

*3 地域人類学という概念がないわけではない。Annual Review of Anthropology などは折に触れて特定地域内での人類学の成果を総観する。例えば Fardon [1990] の民族誌の地域的伝統などという

のもそれに近い。またマレーシアなどでは、人類学と社会学とがひとつの学科として扱われているが、この学科の発展方向のひとつとして「地域研究」が目指されていることは注目してよい [Abdul Rahman 1995]。なお、地域研究企画交流センターは国立民族学博物館に付置されている。しかしこれは同センターを博物館が便宜的に一時支援しているということであって、センターは博物館とは学術的にも独自の活動を行うことが期待されていることは言うまでもない。

間違いなく、そうであるが故にどんなタイプの地域研究であっても地域研究として奨励されているし、一人一人の地域研究者が自分がしている研究が地域研究だと思っているように見える。それでも良いのだが、一方では地域研究が制度化され、地域研究ということが大げさに取り上げられている。時流に流されない地域研究を真摯に求めるかぎり、しっかりと地域研究の立論を見極めて、地域研究独自の作品の評価のあり方を確立していかねばならない。本論はそれに向かったささやかな試みである。

本論は以下の3節からなる。

II節では、地域研究の対象・方法・目的について概観する。

N. ルーマンに倣っていえば、地域というのは幻想かも知れない、しかしその幻想自体は現実のものである。^{*4} したがって地域には「経験的に」境界がある。幻想ないしは想像力という現実の経験に基づいて地域が構成されるのである。地域研究というときの地域とは何か。それをどう捉えるかによって地域研究の対象も変わってくるというのが研究対象論である。これを左派の地域実在論と地域は操作概念であるという右派とに分けて論じる。

対象の捉え方の違いによって当然とられる方法も異なってくる。あくまでも地域全体を包括的に総合的に捉えなければならないという全体主義論は左派である。そのようなことは不可能であり、現実にディシプリンの蓄積があるのであるから、それに基づいた方法論であるべきだというのが右派である。

目的は本来最初に論ずべきかもしれない。しかしここでは、対象の中に問題意識あるいは何を問題としてそれを研究対象とするかということまで含めていることと、「地域」という対象の考え方がアプローチの違いを生んでいるという認識の下に対象と方法をまず論じるわけである。目的というのはいろいろなレベルの相違がある。本論では個々の研究者が唱える目的を集約するのではなく、対象と方法とにおける相違が生む帰結というぐらゐの意味で目的を考えている。

この3つはそれぞれ、地域性、総合性（全体性）、現代性という言葉に収斂させられる。それをどう考えるかということによって、ディシプリンに固執する右派とディシプリンを無視しようとする左派とが出てくるのである。目的・対象・方法について先取りしてまとめておけば、右派というのは地域研究に情報収集分析の場を求め、地域に見られる特定の現象を研究対象に選び、既存のディシプリンの方法に執着し学際的研究を志向する。左派は地域の理解、総合的地域像を求めて、全体としての地域を対象とし、新たな地域研究固有の方法論を確立しようとする。繰り返していうが、ディシプリンと地域研究とを相対立する二元的なものと捉えているのではない。地域研究といういろいろなアプローチを含むスペクトラムのなかで、議論の糸口となる点を際立たせているだけである。

広義の方法論を概観した後には、III節でそれでは両派はどんな作品を生もうとしているのか、

*4 ルーマンの『社会システム理論』の英訳本に付された Eva M. Knodt による序言に引用されている [Luhman 1995: 493]。

それで地域研究という教育は可能なのか、ということについて若干のコメントを加えることにする。IV節では地域研究の将来はどんなイメージが描けるのかということに触れて締めくくりとしたい。

II. 対象・方法・目的

1. 地域性 (研究の対象)

a 地域設定

地域というのは空間単位であると普通考えられる。しかしその空間を切り取るのに、①生態空間とでもいえる自然環境に注目するのか、②活動主体である人間に焦点を当てるのか、③それらが入り組んで生起させる事象・システムを分析するのかによって地域概念は違ったものになる [応地 1995]。何を認識の対象にするかということは、同時にその対象が本当に存在しているのか、研究者が勝手に作り上げたものかという存在論にもかかわる。前者にとって、地域概念は実在世界の忠実な概念的コピーとでもいうべきものであって、対象としての地域は実在し、それを摘出するのが地域研究者の役目であるとする。地域はひとつの全体 (entity) として内在的秩序のある確固とした領域なのである。この左派的言説は、特に生態空間をどのように区切るかという分節化の時に強い主張となって表に出てくる。もっとも高谷好一のように「世界観を共有する全体」というように、人・事象を強調する見方もある。左派の人は地域が実在するというが、実際に線引きをする人は少なく、またしたとしても合意を得るような境界はなかなかできないようである。唯一といってもよいくらいの例外が、高谷好一の「世界単位」による区分である [高谷 1996]。

地域の実在概念に対して、地域は操作概念に過ぎないとする右派は、地域というのは人間・研究者が便宜的に区切った空間に過ぎず、虚構であるとする。実態は国家や国家連合であって、地域の内容が実態としてあるのではなく、せいぜい関係の束として重複的、重層的にしか地域を捉え得ないという [山影 1994]。右派の人は事象それもシステムとでもいうべき事象を見つめていて、実際には左派の強調する地域性の空間的・生態的基盤を無視しているといえる。

私としてはすぐさま左派につくとか、右派につくというのではない。おそらく関係論的な見方、あるいは地域概念をケストラーが唱えたようなホロン（「生物における個体・器官・組織・細胞のように階層構造の中間段階にあって、一つ下段には全体として働く実体に対して与えた名称」【広辞苑】第4版）として捉えねばならないだろうというところは右派的に近いのかもしれない。しかし地域という実体の理念型は抽出可能であり、それを摘出するのが地域研究者だという点では左派的になる。地域が「器」としてそこに最初から存在しているというのではない。あくまでも地域形成という動的な捉え方をしなければならない。これを area framing というふうにいいたい。その最適単位を「世界単位」[高谷 1996] というのには賛成である。地球世界が理論上はネットワークによって結びつけられた世界であるとする、その地球世界を一次的に分割するのが地域研究者のいう「地域」であるべきだという意見である。framing の主体は

誰であるか、と問い詰めるのが現今の言説の風潮である。誰かという主体を昇華させて、たくさんの人に納得させる framing であればよいと私は主張する。地域に住む人（主体）の幻想というのは万能ではない。もちろん地域研究者の地域概念が空虚な幻影であり、支配者のためのディスコースに過ぎないかもしれないことは認めねばならない。そうではないように研究者が批判的に努力する以外に、誰が客観的に審判することができようか。

地域設定に当たっては、時間軸ということが問題となる。地域単位というのは不変なのかということである。環境変化、社会変動、歴史的展開を見れば、地域というのが変わらないということはいくら左派であってもいい得ない。地域区分の最も確かだと思われる基準の自然環境も、砂漠化、温暖化、森林破壊が現在進行しているように、変貌の過程を経ている。ただそのような生態的变化にもかかわらず、F. プロードルがいうような、永続的な構造としての地域、固有性を持続させている地域ということは主張できるかもしれない。私はこれに対して、人類史における地域というものを踏まえて、「エコ・アイデンティティ」(eco-identity) [立本 1996a] というようなものを考えている。

b 地域の意味

意味は全体と部分、部分と部分との連関対比・差異化のなかから生まれる。もともと実体として地域という全体があるとする左派は、地域という単位の存在を主張しているのであるからそれ自体で有意味であると考えている。それに対し、右派にとっては地域自体に意味がないことは明らかである。地域には、恣意的な意味を付与するか、機能的な意味を見つけただけである。それでも地域研究と称するのは、地域を研究者の寄り集まるフォーラムぐらいに考えているのであろうか。

私にとって地域あるいは世界単位というのは戦略的な枠作りによって見えるようになる単位である。単位となる条件は、理論的には地球規模的な比較の上で、「エコ・アイデンティティ」を持っているということ、そして現実的には、単位としての尊厳、自治あるいは自己組織化が他の単位から認められ、地球世界的に認知を得ることである [立本 1994]。接近する角度は違うが、その枠についてはカヴォリスが文明に与えた定義に大変近いものと考えている。彼によれば、まず有意義な（象徴的に組織されている）全体・総体である。その全体は、現に機能している特定の社会や特定できる文化の境界を越えることを特長としている。そしてその中に、時と共に構成を変える「諸文化群」として、いくつかの社会や文化を包括している [Kavolis 1995]。文明といおうと、「世界単位」といおうと、くくる論理、シンボルを提供するというのが地域研究者の役目であり、それが地域の意味となるともいえる。

c 研究の内容

地域を研究するのが地域研究である。右派にとっては、地域そのものではないが、地域にある対象・現象を何でもよいから研究していればそれで済む。日本のことを研究しているのは、すべて日本の地域研究者ということになる。日本における癌の特性などというテーマはそれ自体立派な地域研究なのである。地域でのディシプリン研究なのである。したがってディシプリンからの要請で研究対象は決まってくる。理論検証のための事実を集めればよいのである。

左派は建前として地域についての総合的把握を目指す。その時の全体とは何なのか、総合とはどうすることかについては必ずしも答えられないことが多い。それを目指しているのである。理念としては地域全体ということを用いる。実際には、地域特有の問題群を対象とすることになることが多い。

私にとっては地域という全体の枠組みが大事なのであって、その枠のなかで、枠に意味を持たせながら小さな問題に取り組む。問題はできれば地域に特有なものである方が望ましいが、ディシプリンの要請による問題でもよい。ただ地域という枠によってディシプリンでは見えないものを見るようにしなければならない。

2. 総合性（研究の方法）*5

研究の方法を、事実発見、理解（了解）、説明、理論と並べると、左派は事実派、右派は理論派ということになる。しかし事実発見から地域の総合的把握という課題までは大きなギャップがあることも確かである。

左派の方法論を描くのは難しいが、右派はこの点極めて明快である。それは地域でのディシプリン研究であるからである。既存の確立されているディシプリンの方法論に基づけば、方法論の欠陥はディシプリンに押しつけることができる。学際的・多面的アプローチが地域研究では謳われるが、新しい発見はディシプリン内で理論化されるに過ぎない。いわば既存知識の応用研究に過ぎない。比喩的にいえば、自己から世界を考えているに過ぎず、自己の否定という契機を含まないので、常に対象論理に止まらざるを得ない。*6

左派の方法論はいまだ明瞭な形をとっていない。便宜的にディシプリンの方法を地域の事情に適応させながら、ディシプリン自体を再構築していくというのは最も分かりやすい。そして限りなく右派に近づくことになる。

地域研究という場から見れば、右派の方法はディシプリンの寄せ集め（conjunction）であり、左派は個々の研究者による総合（synthesis）であるということのはっきりしている。

そもそもディシプリンとは何なのか。ディシプリンを越えるとは何を意味するのか。ディシプリンであることをやめてしまうのか。新たなディシプリンとなるのか。「超越とはつねなる逆限定を伴うものであって、一方的超越は超越ではなくそれから離脱することとなる。或るものを超越するとは、却ってそのものの内部へ深く入ることである。」[務台 1996: 132] ということは、ディシプリンに徹底することによってディシプリンを初めて超越できるのだと、右派の人は言うであろう。左派の人はそれに対して、次のように言う。ディシプリンというのとはもと地域において、地域を元に分化した文化的知識に過ぎない。それを超越する場合は、ディシプリンではなくその根源の地域であるべきだ。超越する主体は自己・世界なのである、と。

* 5 総合性、綜合性、全体性と日本語では言われ、英語で integrated, global, holistic, synthetic といった形容詞で表現されるが、本論では方法論的な意味において、総合 synthesis を使う。

* 6 対象論理、場所論理については西田 [1989 (1946)] 参照。なおこの論文が書かれる前に発表された務台原作の本が再版されている [1996(1944)]。

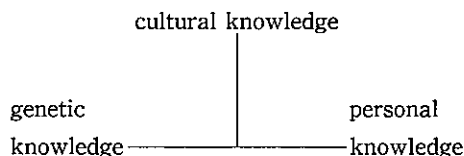
西洋でディシプリンが確立してきたのは過去2世紀ぐらいで、この期間にすべての知識は何らかのディシプリンの形をとって制度化されてきたという。^{*7} 社会的にそして概念上でも、ディシプリンに陶冶・調教されているのが現実である。ディシプリンというのは、まず学問の世界を生産する。このことは、何を研究対象とすることから始まって、知識の評価基準や方法論を押しつけることにまで至る。2番目にディシプリンに従事する人を生み出し、正統-異端、特殊専門家-総合専門家、理論-実験などの区別をつける。3番目には、携わる人々に市場 (economies of value) を確保する。会議ペーパー、論文、単行本、受賞作を生産し、一定の職にありつけ、給与、研究資金、奨学金などが保証される。4番目に、研究の蓄積などによって学術的 (ひいてはもっと一般的な) 「進歩」の概念をもたらす。

このようにディシプリンの中に埋没してしまっている状況のなかで、ディシプリン自体は次のような形で増殖している。①歴史的に形成されてきているという系譜 (genealogies) への執着、②ディシプリンの境界を明確化していく (boundary-work)、③ディシプリンの中で際限なく分野を分割していく (field construction)、④社会化過程としての訓練 (socializing practices) を徹底させる。これらはディシプリンの特性といってもよい。

脱ディシプリンといった時に、これら全部を否定することはむつかしいように私には思える。私にはせいぜいディシプリンの特性を次のように言い換えて、地域研究の特性でありたいと主張するくらいである。①系譜に対して突然変異 (mutation)、②境界を場・場所・地域に求めて area framing をモットーとする、③常に全体像を求める (synthetic configurations)、④フィールドワークに基づく (fieldwork practices)。これとても、常に突然変異を起こす学問とはいったいどんなものなのか、あるいは、一度突然変異を起こせば新たなディシプリンとなるのか、地域、全体、フィールドワークについても方法論的裏付けは十分なのか、などという疑問がすぐに沸き起こってくる。しかし、少なくともこれくらいの特性は作り上げねばならない。というよりこのような境地に遊ぶといった方が良いかもしれない。

さらに一步を進めるとすると、「知識」に対する根本的な批判であろう。ディシプリンの知識というのは文化的知識の一種に過ぎない。それも世界中のすべての知識を網羅しているというわけではない。知識には、文化的知識以外に、遺伝子によって作られる生得的知識、個人特有の本人だけの知識もある。それを図示すれば次のようになる。^{*8}

図1 3つの知識



*7 ディシプリンについては Masser-Davidow et al. [1993] による。

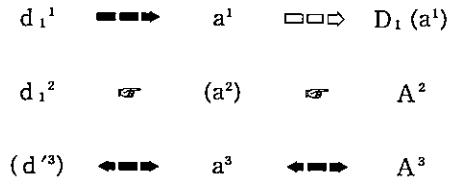
*8 三分法の分け方は Shore [1996] による。彼は人類の心理的な均一性 (psychic unity) につい

て、民族誌的な理論を提出している。三分法はそのための基本的な枠組みである。彼は図を示していないが、私の理解の仕方図示した。

地域研究が知の枠組みを再構築すると広言する時には、いろいろなアプローチがあろうが、単に文化的知識の一部を占めるディシプリンの軌道修正ではなく、他の知識、感性、感情をも包み込んで、もっと根源的に知、知識を見つめねばならないような気がする。上記の特性はその契機となるべきであろう。

確立したディシプリンと地域研究における地域との関係は図2のようになる。

図2 ディシプリン(D)と地域(A)の関係



Aは地域の全体像、Dはひとつの確立されたディシプリン全体を意味する。小文字のaは地域の個性や特性を表す。小文字のdはディシプリンの方法論に沿って解析された事実を指す。d'はそれからずれた観察結果、分析結果を示す。上付きの数字は個々の地域を指す。A¹、A²、A³はしたがって別の地域単位である。D、dについた下付きの数字は、経済学、地理学、文学、農学、工学、医学のように、分野の違いを示す。d₁¹はD₁というディシプリンから見たA¹地域の事実である。

ディシプリンはd₁¹またはa¹という事実から、そのディシプリンの中で理論化する。D₁(a¹)である。そしてそれをもってA¹に普遍化し、それが地域の特色だとする。ただし、D₁(a¹)からA¹への推論は厳密でないし、全体像であるとは言いがたいのが当然である。

地域研究はむしろ、A³という枠があるからa³またはd³という事実が見えてくる。言い換えれば、d³という事実がA³の枠の中で見るとd³あるいはa³として捉えられるということである。

この2つの中間に、いろいろなディシプリン(d₁¹+d₁²+d₁³)を折衷的に用いて、そこから地域の特性(a¹+a²+a³)を抽出し、その特性の寄せ集めを地域の全体像(A²)とする行き方がある。恣意的な抽象であるとの批判を受けやすいし、職人的な手法を要請される。

左派は既存知識の応用研究ではなく、地域に基づいた基礎研究をするという。したがって地域という世界から自己を考え直すといえる。形が形自身を限定する世界といってもよく、対象論理ではなく、場所論理、創造的直観に基づいている。高谷の景観学的手法というのもこのような方向を目指したものであろう。文明生態史、比較文明学も案外近いところにあるのかもしれない。

私は地域研究の中核となる学問領域を生態学、人口学、文明学といったことがある[前田1989: 192]。これは地域研究に目覚める過程にもっとも近いところにいるはずの学問領域という意味で、これらが特権的な位置を占めているというわけではない。これらに人類学、歴史学、地理学、農学などを(あるいは、工学、医学なども)加えてもよい。これらの中から、根源的な自覚を経て、ディシプリンを越え、単なるインクリメンタルな研究の域を脱して、ブレイクス

ルー研究が出てくるのが期待されてしかるべきなのであるが、逆に地域に対するなじみから自己反照的・批判的な研究が出にくいということもある。

3. 現代性（研究の目的）*9

研究の目的に関しては、一方は地域の理解そのもの、総合的地域像の抽出を目的とし、他方は地域が大事なのではなく、情報分析と理論検証が目的であるといえる。これ自体はそれほど問題はないかもしれないが、右派の本音は、地域研究は学問領域ではない、地域に関する知識の欠如を早急に埋める一時的な対策としては認められるが、学問としての地域研究などはあり得ないということにある。左派は、なぜ「地域」が研究対象の単位とならねばならないのかということについて、世界秩序の構築ということを目的に掲げる。いずれにしても、「現代の」地域の研究ということでは目的を同じくする。

地域研究が歴史を含むかどうかということは歴史学のあり方にも依る。左派はおそらく歴史を分からなければ地域は理解できないであろう。確かにそうであるが、それでは従来の歴史学の成果をそのまま是認するのかということになる。もし是認するのであれば、地域研究の存在根拠はなくなる。現代社会の諸科学に対する批判から生まれた地域研究が、過去については無批判に従来の研究成果をそのまま鵜呑みにすることになる。過去に対して批判的に研究できないものがどうして現代を切り得ようか。逆に、もし是認せずに、それでも歴史が必要というのであれば、地域研究に基づいた歴史観を打ち立てねばならない。

歴史学に限らず、人類学にしても地理学にしても、実際の成果の蓄積には大きな差があるとはいえ、研究の対象が多様であるということにおいては地域研究と余り違わない。歴史学や地理学が右派として地域研究にかかわるといえるのは想像しにくいですが、それでもそれらとは違った地域研究固有の目的が左派には問われるわけである。それをあいまいにすると結局は右派の道となる。

地域研究の目的は、変動する現代をよりよく捉える枠組みとしての地域、将来の新しい世界秩序の実現可能性の高い枠組みとしての地域の解明である。そして特に、人文社会科学全体の再構築が地域研究という場でなされることを期待している。言い換えれば、地域研究の目的は知の再編成である。したがって、地域研究は場であるとともに、それ自体がいくつかの新しいディシプリンに分かれていくのではないかという予感も持っている。

III. 何を生むか

1. 作品

ある地域に関するすべての研究の成果が地域研究であるとするのはナンセンスである。これ

* 9 現代性を松原正毅は「現在性」という。いま・ことということ強調する場合、現実性（現実

態）、現存性といってもよいように思う。私は同時代性（coevality）という言葉を使っている。

は、いわばディシプリンの成果を地域によって分類するというに過ぎず、何のために地域によって分類しなければならないのかということになる。左派にとっては、右派の地域研究の作品などあり得ないということになるであろう。右派が地域研究の作品とっているのは、ディシプリンとして質が低いから地域研究であるといっているに過ぎないという中傷さえなされる。そしてこのまったく同じ中傷は右派から左派にも投げかけられる。

右派はテーマの細分化、精緻化をモットーとして、検証、予測を心がける作品を生む。ディシプリンという後見人がいるので、ともすれば安易な生産主義に陥りやすい。ディシプリンに添ったデータを得、方法論に則った分析をすれば、「完結」した研究論文として認められ、研究市場で地位を保全できるからである。左派は当然全体的な視点を強調し、記述、生成 (generation) を心がける「総合」的作品を生もうとする。^{*10}

何をもち作品とみなすかということは具体的な事例を見るのが一番早い。たまたま地域研究叢書というシリーズの第1巻と第2巻として、高谷好一『「世界単位」から世界を見る——地域研究の視座』と坪内良博『マレー農村の20年』が京都大学学術出版会から1996年初めに出版された。前者はユーラシア・アフリカを題名通り、世界単位として再解釈を加えた上で記述したものである。歴史を重視して現代性に欠けているように見えるが、近代以降の世界に対する危機意識・問題意識は極めて現代的といえる。地域研究の左派的作品といっても間違いではなかろう。それに対して『マレー農村の20年』は、終わりに「マレー農村研究とその周辺」と題して広い視野からの展望がついているとはいえ、基本的にはコミュニティの社会変化を精密に捉えたもので、これを左派的な意味で地域研究とするには程遠い。むしろ右派的作品を代表するようになる。いま流行の社会学ではないかもしれないが、社会学の作品として立派なものである。しかしこのままでは、例えば奇しくも同じクランタン州の20年の変動を扱った Rudie [1994] 同様、マレーシアでは社会学・人類学の作品として取り扱われ、地域研究としては決してみなされないであろう。もっと広く東南アジアの人にとっても事情は変わらない。日本人による外国の研究であるという理由だけで、日本では地域研究というカテゴリーに分類されるのである。

もちろんこの2つの作品の作者が左派、右派というわけではない。また作品自体の学術的評価をここでしているのでもない。問題は地域研究固有の作品などがあり得るかということにもなる。左派にはいまだ十分な作品がないので、あるいは従来のディシプリンの作品を地域研究の価値基準から評価していないので、右派的な作品も地域研究として扱って反省しないところがある。右派にしる左派にしる、地域研究と名のるからには、東南アジア、あるいはヨーロッパなど、対象の地域の学界においても、既存のディシプリンとしてではなく、地域研究として評価されるような、具体性、独自性、個別性を兼ね備えた全体像を形として提示する必要がある。

*10 「完結」と「総合」とはそれぞれ、古典主義と浪漫主義との対立する理念でもある。大西 [1960]

参照。

2. 教育

衛藤藩吉 [1995] は、地域研究者となることのむつかしさを五重の負担として表現した。まず日本人としてのアイデンティティを忘れてはならないということ。次に対象国の言語の修得。それと同時に歴史、社会、心理、宗教など、対象国の文化の理解。そして、ディシプリンの研究手法と研究に必要な言語。これはこれで大変立派なモットーであり、この心構えはすべての地域研究者に必要なこととも思う。しかしこれだけではやはり右派の域を出ない。左派になるにはどのようにしたらよいか、どのような教育をすべきか。左派はこれに対して何らの答えも出していない。

右派にとって地域研究の教育はディシプリンのための教養提供に過ぎない。地域研究という教養から、ディシプリンという専門に特化するのが正道である。ディシプリンの風を強く学生は受けて、地域研究からディシプリンへの道をたどる。それに対して左派は、明確にどんなタイプかは必ずしも明らかでないが、一応地域研究学者、あるいは専門家を養成しようとする。ディシプリンというのは方法に過ぎず、それを利用して地域研究を構築（再構築）しようとする。地域の雰囲気にとっぷり浸かって、学生はディシプリンから地域研究へと目指す。

私は一度地域研究の教育について悲観的な意見を書いた [立本 1994: 7]。今でもそれは変わらない。時期尚早というのがそのひとつの理由である。しかし地域研究の大学院も増えてきた。体系的な教育を考えねばならない現状になってきている。試行錯誤で、ともかく試みるというのもひとつの行き方ではある。もちろん、その基盤である地域研究自体が形をはっきりさせることは常に課題としてあるが、それを承知で、今現在どんなことができるか。

学生はフィールドに放り出しておけば何とかなるという、ある意味では反訓練 (anti-discipline) の方針は左派の人に多い。きっちりとした学部でディシプリンの訓練を受けてきた優秀な学生であればこれでうまく行くことが多いであろう。それでも地域研究の学部教育はないのであるから、そのように養成される学生は教育されたディシプリンを深めるだけで、左派的な地域研究の教育にはなっていない。地域研究の勉強を学生自身がするにしても、モデルとなる地域研究の作品はあまりにも少ない。右派の人は自分の受けてきたディシプリンを地域研究研究科で教えようとする。しかしディシプリンを中心に教育するかぎり、そのディシプリンを持った学部の延長上の研究科の方がずっと効率が良いと私は思う。日本に情報の少ない、あるいは戦略的な意味を持つ地域の研究科を年限を切って設立するのはそれなりの意味がある。そうでなければディシプリンの研究科を強化する方が良い。地域研究研究科では悪くするとディシプリンの垂流の教育しかできなく、中途半端な学生を生むことになる。

地域研究専門家、一般研究者、国際人の養成いづれにしろ、地域研究専攻という卒業者にどのような職があるのかという現実的な問題もある。社会的要請があるから地域研究研究科ができたけというのでは将来困るであろう。

アメリカでは地域研究は副専攻として扱われ、主専攻にディシプリンがおかれていた。今の日本の地域研究科は地域研究が主専攻、時には副専攻のないそれだけの専攻なのである。このことの意味は大きい。

世間で考えられているのとは逆説的な言い方も知れないが、まず地域研究の教育は、科学的態度（何であるか、問題に対する理論的研究）よりは思想的態度（どうするか、問い方）により重点を置くべきであろう [村井 1976]。地域研究そのものは地域の問題群から出発することはもちろんであろうし、世間の期待というのは地域に関する事実を手取り足取り教えてもらうことかもしれないが、それはせいぜい学部での教育である。問題群を正しく見つけ出すのは学生がフィールドにおいてすることであって、問題群そのものを教えるというのは地域研究の大学院教育ではない。技術的専門教育より一般的教養教育という基礎作りだけが本来地域研究の教育として目指さねばならない。もちろん教養というのは、直観力・意見形成の能力をつけるという根源的な意味である。

実際上の教育はここで何だかんだというよりは、リーディングリストひとつとっても種々な技術的工夫によって、うまくいくのかもしれない。それを支えてよりよくするために、地域研究に必要な環境の形成に次のようなことを考えている。①指導教官が3人から6人の複数指導体制が必要である。これは単に論文の査読者としてではなく、日常的な指導が得られるという意味である。②地域研究原論：とくにパラダイム認識ないしは準拠枠の転換をどうするかということについての原論で、事実、解釈、批判、表現の問題について取り扱う必要がある。資料収集・観察・調査・実験などの事実の問題、理解や評価を伴う解釈の問題、想像・翻訳・記述などにかかわる表現の問題などは、area framing を取り入れるかぎり、ある程度既存のディシプリンの手直しでもできる。大事なのは批判で、これは臨床知とでもいえる。それによって、隠れた構造の暴露、代替的な発展可能性の展開、危機的問題状況の解明などが図られねばならない。③総合的な地域情報の蓄積と利用体制が整っていないといけない。地域情報の授業をカリキュラムの中に入れるのは限界があるし、実用的ではない。必要に応じて取り出せる情報システムの整備の方が大切である。④言語、調査法、ディシプリンなどの技法習得コースを他学科、他大学と協同して整備する。⑤臨地研究は必須である。⑥地域研究としての評価を明確にする。

このような環境整備の必要性は既存のディシプリンでも大同小異であろう。いかに地域研究の特色をだすかはこれらの条件ができてからということかもしれない。

IV. 地域研究の将来

左派の人にとっては地域研究の将来はばら色である。地域研究者は世界秩序の構築者として、国家に代わる世界単位によって地球世界を分割する。いわば司祭としての役割が与えられているのである。ある特定の地域の地域研究機関は、先端科学の寄り集まるフォーラムとして、知識の再編成を担うエージェントとなる。そこでは既存のディシプリンにはなかった地域研究学のようなものができると考えている人もいる。

右派の地域研究者にとって、地域研究は一定の役割を果たせば、消滅していくものに過ぎない。もし生きのびるとしても、それぞれの学問分野の供奉者として、地域研究が、国家データベースの供給、戦略的外国研究によって、あるいは科学的オリエンタリズムとして、新しい情

報を供給していくのが関の山であろう。地域研究機関は地域に関する情報提供を業務とし、博物館に対する博情報学の殿堂となろう。^{*11}それが学問的にどれだけの意味を持っているのかは未知数である。しかし確実なことは地域の情報と一言でいってもそれは膨大なものであるということである。すべてのディシプリンの成果を集めた、地域の詳細な百科事典を作るようなものである。過去にたくさんの百科事典が作られてきたが、地域情報の完璧な百科事典というのはいまだ作られたことはないし、今後もできないのではないかと思うほど、その情報は無限といってもよい。

無限に集められる情報を取捨選択するのはディシプリンだけではできないし、ディシプリンの寄せ集めの百科事典を作っても、それはストックとしての意味があるだけである。ストックだけの知識は死蔵されているに等しい。地域の総合的把握という左派の叡智がないと無意味なのである。「地域研究の先端的問題群を脱構築的に解き、新しい知のフロンティアを切り開こうとする試み(ω)と、地域の情報資料を集めて、諸分野の基礎データを整えようとする後追いの地域研究(χ)とを常に止揚」していかねばならない所以である。[立本 1996b: 318]

地域研究が学問としてブレイクスルーを果たし得るかどうかが。最初からそのようなものは期待できるはずがないという極右派の人もいよう。地域研究というのは情報収集に徹し、それに厳密な科学的分析を加えるのはディシプリンでよろしい、情報収集が地域研究の使命であるという右派的な見方もある。しかし左派は言うに及ばず、右派の人でさえも、地域研究という名称をわざわざ使うかぎり、そこに何かのロマンチズムを感じているのではなからうか。おそらくそれは地域研究が何らかのブレイクスルー研究になるということであろう。右派はたとえブレイクスルーがあったとしても、極めて小さなものでディシプリンの枠の中に納まるものであるという見通し・期待を持っている。左派は世界を震撼させるようなブレイクスルーがあり得るし、それを目指さねばならないとする。その中間に、ブレイクスルーによるディシプリンの解体と再構築、あるいは新しいディシプリンの生成を夢見る人々が位置付けられる。

翻って、地域研究者の唱える地域研究の将来ではなく、実際の地域研究の歩みはどうか。私は右派の言説は獅子身中の虫だといったが、右派の人の存在を否定するつもりはない。地域研究の研究機関には右派、左派ともどもいろいろな人が集まるのがその活性化の原動力だと思っている。ばらばらであるということ自体がすばらしいことだと思う。違い、差異を認め合う世界である。しかし、ばらばらのままであれば、地域研究という場に結集する必要はないわけで、ばらばらで一緒という場＝世界、地域研究という場にいる自覚を持たねばならないといっているだけである。学問の探究者として一緒、目覚めた人類として一緒だけでは、地域研究機関にいる必然性はないわけである。地域研究という名称にこだわるのはここである。違うのがある、自分には関係ないという、単なる相対主義ではなく、違いに対して無関心ではないという、本来の多元主義でなければならない [Rescher 1993]。

新しい学問分野は最初から方法論が確立しているというより、その名前に集まってくる人達

*11 博情報学というのは松原正毅の用語である。

の作品によって徐々に形成されていくといった方が正しいのであろう。認められた作品群がひとつの主張をするようになる。その時には右派の作品、左派の作品などという区別はない。関わっている人達がどれだけ自己の作品を地域研究の作品だと主張し、それが世間に認められるかという事に尽きる。右派の言説は地域研究という独自の営為を殺してしまうものであるが、翻って単に研究成果という点から見れば右派が最も期待できるのである。左派からの作品、左派的な作品が少ないという事もある。あるいはそもそも左派的な作品が大量に出てくるのかという前述の危惧も拭い去れない。それにもかかわらず、右派的言説に固執するかぎり、ディシプリンの作品は生まれても、地域研究の作品はでてこないというのが論理的帰結である。がともあれ、地域研究にコミットした研究成果が、どれだけ地域研究独自の作品であるかという評価にすべてはかかってくる。そしてその評価は自身の作り上げる新しい知の枠組みから主張されねばならないのである。その評価をみんなに納得させる努力を一緒にしなければならない。

引用文献

Abdul Rahman Embong (ed.)

1995 *Antropologi dan Sociologi : Mengaris Arah Baru*, Penerbit Universiti Kebangsaan, Malaysia.

衛藤藩吉

1996 「五つの負担」『総合的地域研究』10: 1

Fardon, Richard (ed.)

1990 *Localizing Strategies : Regional Traditions of Ethnographic Writing*, Scottish Academic Press.

Kavolis, Vytautas

1995 *Civilization Analysis as a Sociology of Culture*, Edwin Mellen Press.

Luhman, Niklas

1995 *Social Systems*, Stanford University Press.

応地利明

1996 「地誌研究と地域研究——認識論的ノート」西川治編『地理学概論』所収。朝倉書店

前田成文

1989 『東南アジアの組織原理』勁草書房

Masser-Davidow, Ellen, David R. Shumway & David J. Sylvan (eds.)

1993 *Knowledges : Historical and Critical Studies in Disciplinarity*, University Press of Virginia.

西田幾多郎

1989(1946) 「場所的論理と宗教的世界観」『西田幾多郎哲学論文集III』所収。岩波文庫

務台理作

1996(1944) 『場所の論理学』こぶし書房

村井実

1976 『教育学入門』上、講談社学術文庫

大西克礼

1960 『古典的と浪漫的』アテネ文庫、弘文堂

Rescher, Nicholas

1993 *Pluralism : Against the Demand for Consensus*, Oxford: Clarendon Press.

Rudie, Ingrid

1994 *Visible Women in East Coast Malay Society : On the Reproduction of Gender in Ceremonial, School and Market*, Scandinavian University Press.

Shore, Bradd

1996 *Culture in Mind : Cognition, Culture, and the Problem of Meaning*, Oxford University Press.

立本成文

1994 「東南アジアをくぐる論理と世界単位」『総合的地域研究』6: 3-7

1996a 「地域間比較とアイデンティティ」『総合的地域研究』12: 17-20

1996b 『地域研究の問題と方法——社会文化生態力学の試み』京都大学学術出版会

高谷好一

1996 『「世界単位」から世界を見る——地域研究の視座』京都大学学術出版会

坪内良博

1996 『マレー農村の20年』京都大学学術出版会

山影進

1994(1988) 「国際社会の地域認識」『対立と共存の国際理論』所収, 東京大学出版会 (原題は「地域にとって地域研究者とは何か——地域設定の方法論をめぐる覚え書き——」)